

一八世紀末フランスの知的エリートとフリーメイソン

— マルセイユの医師アシヤールの内面的軌跡 —

深 沢 克 己

キーワード

啓蒙主義 アカデミー 博物学 秘教思想 メスメリズム

はじめに

クロード＝フランソワ・アシヤール Claude-François Achard (一七五一年—一八〇九年) の名は、フランス史研究者のあいだでさえ、わが国ではほとんど知られていない。フランスでも事情はさほど変わらないが、しかしプロヴァンス地方史の専門家なら、だれでもこの人物について多少の予備知識をもっているだろう。マルセイユ市内で献身的に医師を務めるかたわら、マルセイユ「科学・文学・芸術アカデミー」会員、のちには終身書記として地域の学芸振興に貢献し、また『プロヴァンス・ヴナスク伯領事

典』をはじめとする多くの書物の編集・執筆をつうじてプロヴァンスの言語・文化・風土の総合的記述に先鞭をつけ、さらにフランス革命期には廃止された修道院や亡命者の蔵書保全に尽力し、マルセイユ市司書の資格で市立図書館の創立を準備した功績は高く評価されている。他方フリーメイソン史の文脈では、「三重団結」会所 *Loge de la Triple Union* の会所長として、秘教的・キリスト教的な「矯正スコットランド儀礼」*Rite écossais rectifié* を採用し、その運営に指導的役割を演じたことでも知られる。

とはいえ、アシヤールに関する本格的研究は多くない。おもな業績を列挙すれば、まずプロヴァンス大学の近世史

史苑 (第七二卷第一号)

教授レジス・ベルトランは、この蔵書家の医師について包括的研究をくわだて、その伝記の概要を公表したが^②、研究成果の全体はいまだに出版されていない。また南フランス言語文化の研究者ルネ・メルルは、プロヴァンス事典編集者の言語イデオロギーを批判的に分析した^③。そしてフリーメイソンの立場からは、パトリック・バロが「三重団結」会所の歴史を多角的に研究し、最近ではドミニク・サピアの論文が、秘教的メイソンとしてのアシャールについて、若干の新しい情報をもたらした^④。

本稿の課題は、これらの先行研究をふまえながら、ここではほとんど注目されなかったアシャールの前半生の知的・思想的形成過程について、未利用の史料に依拠しながら、より深めた分析を試みることにある。フランス革命勃発に先立つ十数年のあいだに、青年医師はみずから創設したフリーメイソン会所の指導者となり、マルセイユでは唯一の例として、この会所を「フランス儀礼」*Rite français* からドイツ起源の「矯正スコットランド儀礼」へと転向させる。この転向を必然化した思想的・社会的諸原因については、すでに別稿でくわしく論じたので、本稿ではこの転向のいわば個人的表現として、アシャールの知的関心と内面的欲求の変遷過程を追跡することにより、「啓蒙の世紀」の黄昏のなかで、フランスの知的エリートがたどった軌跡

を、ひとつの事例研究として再構成することにある。利用するおもな史料は、アヴィニョン市立図書館遺文書部エスプリ・カルヴェ文書、マルセイユ学芸アカデミー古文書室アカデミー合会議事録、フランス国立図書館手稿文書室フリーメイソン文書、リヨン市立図書館古文書部ジャン・バティスト・ヴィレルモス文書である^⑤。

一、アヴィニオン医学部教授エスプリ・カルヴェとの文通

クロード・フランソワ・アシャールは、富裕な紙製造業者の息子として、一七五一年五月二三日、マルセイユ新市街のサン・フェレオル小教区で出生した。この街区は当時から貿易商人や地方官僚などのエリート層が居住する高級住宅街として知られ、アシャールの父もたんなる製造業者ではなく、植民地貿易とかかわりをもつ実業家だったらしい。というのも、アシャールが後年カルヴェにあてた手紙のなかで、父親の遺産として「アメリカ」（すなわち西インド諸島植民地）に不動産があり、その資産額は百万リーヴル以上に達するはずだと書いているからである^⑥。一七八三年付の「三重団結」会所の会員名簿によれば、クロード・フランソワには少なくとも三人の弟があり、ジャン・バティスト（一七五六年生まれ）は弁護士、アントワー

又(一七五七年生まれ)は「ブルジョワ」、ジャック(一七五八年生まれ)は卸売商として記載されていることも考慮すれば、アシャル家は中流ブルジョワの家系だったと判断してまちがいないだろう。

クロード・フランソワは七歳のとき、ドFINE地方で主任司祭を務める叔父のもとに送られ、彼のもとで養育されたのち、ローヌ河岸ヴィヴィエのサン・シユルピス小神学校に入学して宗教教育と古典教育を受けた。一八歳でマルセイユに帰還すると、彼は小品級の聖職者に叙階されるが、まもなく聖職を断念して医学に志し、モンプリエとアヴィニヨンの医学部で勉強して、一七七二年一月にはアヴィニオン医学部主任教授エスプリ・カルヴェから博士号を授与される。アシャルはこれ以後、恩師カルヴェから持続的な影響を受け、この先達をつうじて「啓蒙の世紀」の知識人の代表的類型に合流していく。なぜならばカルヴェは、慈恵精神にあふれた医者として、貧しい病人を無料で診療すると同時に、あらゆる方面に好奇心をいだく教養人、愛書家、古銭学者、古物収集家、考古学者、博物学者であり、パリ、リヨン、トスカーナなど、各地のアカデミーから準会員や通信会員に指名されたが、他方では一七四九年にアヴィニオン所在「イェルサレム聖ヨハネ」会所に加入したフリーメイソンでもあり、この会所が一七五一年に閉鎖さ

れたのち、やがて一七八五年には錬金的な「アヴィニオン光明派」に合流した人物だからである。マルセイユの青年医師は、この恩師のモデルに忠実にしたがいなから、知的自己形成の道を歩むことになる。

このような知性の形態が、当時のヨーロッパで広く見出される知識人類型を表現することは、一七世紀イングラントでロンドン王立協会と思弁的フリーメイソン制とがほぼ同時並行的に成立した事情を想起すれば、よく理解されるだろう。王立協会会員の多くは古物収集や博物標本の収集に熱心な科学愛好家だったが、初期のフリーメイソンもまた同じ知的土壌から発生するからである。たとえば王立協会の創立者のひとりで、史料上確認される最初のフリーメイソンでもあるエライアス・アシュモウルは、まさしく古物収集家、古銭学者、考古学者、紋章学者であると同時に、錬金術師、占星術師でもあり、その豊富な収集品がオクスフォード大学に寄贈されて、一六八三年にアシュモウル博物館が創設された経緯はよく知られている。この古物・博物収集家(ヴィルトウオーゾ)の知的類型は、紋章作家ランドル・ホウムから医師・古物学者・自然哲学者ウィリアム・スタクリまで、一七一―一八世紀をつうじて多くのフリーメイソンにより共有され継承される。エスプリ・カルヴェがその豊富な蔵書と美術収集品とをアヴィニオン市に

寄贈し、今日の市立図書館とカルヴェ美術館とに起源をあ
たえたのは、同じモデルの南フランス版にほかならず、や
はり愛書家の弟子アシャルが、革命期の混乱のなかで市
立図書館創立に貢献したのも、同じ類型を継承したにすぎ
ない。

マルセイユの弟子がアヴィニヨンの恩師から持続的に影
響を受ける媒体となったのは、両者のあいだで長期にわた
り交わされた文通である。それはアシャルがまだ医学生
だった一七七〇年四月にはじまるが、初期のアシャルの
手紙ではカルヴェの依頼による珊瑚や古銭や古メダルの探
索と購入の話題が大部分をしめる。たとえば一七七二年四
月には、「アラビア文字の刻まれたきわめて古い」石碑が、
またその数日後には「メダルの一覧表」の入手が話題とな
り、一七七六年六月には「鉄物商人がわたくしに古銭の束
を見せましたが、そのなかで貴下の要望される種類のもの
は一枚だけでした」と報告し、さらに一七七九年四月には
「貴下あてに三枚の銅製メダルをお送りしますが、うち二
枚はギリシア製と思われませう」という通知を送っている。
たしかにアシャルは、この種の骨董品を入手するのに
好都合な場所に住んでいた。博士号取得後、一七七二年に
マルセイユ近郊オバーニュで医院を開業し、一七七五年か
らは郷里マルセイユ市内に居をかまえたので、この海港都

市に流入するあらゆる商品について情報をえるのは容易
だった。もちろん商業経済の変動は、古物や博物標本の市
場にも影響をおよぼす。アメリカ独立戦争中の一七七八年
八月には「とりわけ外国人たちが買い求めるようになって
から」マルセイユ市場から古メダルが消え去ったと嘆き、
また一七八三年四月には、つぎのような興味深い報告を書
き送っている。「和平が成立しても、まだ貴下が望まれる
ような豊富な商品はもたらされていません。先月入港した
数隻のオランダ商船はインド産の貝殻を積載していました
が、二年間もカデイスに停泊しているあいだに、数量がひ
どく減少しました。その大部分、そしておそらく最良のも
のはスペイン人顧客に売却され、われわれに残されたのは
屑ばかりです」。

恩師の依頼による骨董品や博物標本の収集が、弟子の心
にも興味をかきたてたことは想像にかたくない。とくに重
要なのは、いわばカルヴェの代理商を務めながら、アシャル
が古物取引商の地方ネットワークに組み込まれていった
ことである。一七八二年五月二〇日付の手紙はつぎのよう
に述べる。「昨日わたくしは数点のメダルの所有者で、自
分で作製した一三ないし一四の複製を貴下に送ることを提
案する人物と会いました。〔中略〕この人物の名はイレ神父、
もと跣足カルメル会士で、わたくしの見るところ目利きで

す。わたくしが彼の自宅にいたとき、ゴティエ氏の訪問を受けました。同氏はかつてペルラン氏のためにメダルを収集していましたが、自分でも収集するようになりました。彼はこの分野に学識があるとは思えませんが、しかし複製をたくさん持っており、そのリストを貴下に送ってほしいと頼んできました¹⁵。それゆえアシャル自身が、やがてみずから収集家になったとしても、少しも驚くにはあたりません。実際にアヴィニヨンの恩師は、マルセイユの弟子による奉仕への謝礼として、収集品の一部を贈与していた。「正直申し上げて、御好意に恐縮しています。わたくしが貴下にお送りできるのは粗末なものばかりで、貴下はそんな無価値なものでも評価してくださいなのですが、それなのに貴下は大量の品々をお送りくださるので、その結果わたくしの陳列室の四分の三は、貴下からの贈与品でしめられています¹⁶」。それゆえ稀少な品々は、双方向的に送られたのである。

ただしアシャルの書簡は、骨董品や博物標本の話題だけに終始したわけではない。この青年医師は、恩師の例にならって貧しい病人をしばしば無報酬で診療しただけでなく、市内の「大慈悲救護院」の後援のもとに、貧者の訪問診療にも参加していたが、これら医療の現場で観察するさまざまな病気について、アヴィニヨンの教授に意見を求め

ることが多かったからである。たとえば一七七六年一二月には、「わたくしの診察したある病人の症状を御説明しますので、貴下の御助言をたまわりたく存じます」と書き、一七七八年八月にも「経過が奇妙で疑わしく思える症例について、貴下の御意見をたまわりたく、お願い申し上げます。すなわち健康な女性なのに、一か月まえから肝臓のあたりに痛みがあり、焼けつくような痛みだと、本人は言っています」と報告し、さらに翌年七月にも、「貴下にわたくしの疑問をお伝えし、当地ではよく見られる病気について御意見をうかがいたく存じます。というのも症状があまりに多様で、ほとんど判別不可能なのです」と相談している¹⁷。要するにアシャルにとり、カルヴェは依然として指導を求めべき医学教師だった。両者の関係の親密さと、弟子の恩師への尊敬とは、こうして長らく持続したのである。

二、マルセイユ学芸アカデミーへの入会

アシャルが医療のかたわら、本格的な学術活動に着手するのは、三〇歳前後の年齢に達してからであり、その手始めは「帽子製造業者の疾病に関する小論文」の提出により、一七八一年にパリ王立医学協会の通信会員の資格をえたことである¹⁸。これにつづくのが一種の地方百科全書

である『プロヴァンス・ヴナスク伯領事典』*Dictionnaire de la Provence et du Comté-Venassin* 全四巻の刊行であり、一七八五年中に最初の三巻が出版された。後世の研究者がしばしば批判したように、この著書があまりに短期間に準備され、性急に刊行された感は否めない。なぜならばこの出版計画は、一七八三年春にジャン＝バティスト・ジェルマンの相続人から、その遺稿を刊行する計画が提案された時点ではじまったのに、すでに同年八月には、アシヤールからカルヴェアてに校正刷りが送られ、必要な修正が依頼されているからである。彼の主著となるべき書物が、これほどあわただしく準備されたのは、彼の生来の性格によることはたしかだが、それに加えて、もともと彼がこの刊行に乗り気でなかったことが作用していると考えてよいだろう。カルヴェアて書簡に「このうんざりする仕事を引き受けたことを後悔しています」と書いているように、なるべく早く自分の手から離れることを望んでいたふしがある。とはいえ彼自身も認めるように、彼は著者というより編者または校正者に近い役割を果たしたにすぎず、ジェルマンの遺稿を含めて、多くの執筆者による原稿を集成した作品である。ともあれこの書物刊行は、アシヤールがマルセイユ学芸アカデミー会員に選出されるのに役立つと推察される。アカデミー会合議事録に記されているように、彼は

各巻が刊行されるたびに、それをこの団体に寄贈していたからである。「当市医師会所属の医師でプロヴァンス語事典の著者アシヤール氏の手紙を朗読。この手紙はアカデミーに寄贈された上記の書物に添付されていた」（一七八五年八月二二日）。「医学博士アシヤール氏によるプロヴァンス語事典第三巻を、グロソン氏が執務室に収納」（一七八六年一月一八日）。

ところでアシヤールのアカデミー入会の経緯を語るまえに、ほぼ同じ時期に進行する知的生活上のひそかな変化について論じておくのが適切だろう。この変化はこれまで指摘されたことはないが、やがて重要な結果をもたらしたと推測される。それは博物学（自然史）、とりわけ鉱物学に対する関心がしだいに高まり、やがて狭義の古物（骨董品）に対する関心を薄れさせただけでなく、医学と医療への熱意をも減退させることになる。早くも一七八〇年一〇月のカルヴェアて書簡で、アシヤールは「博物学の収集に興味をおぼえます」と書き、恩師に助言を求めていたが、翌年二月にはこの興味が亢進し、つぎのように宣言するにいたる。「わたしは古物学者や古メダル学者になろうとは考えておりません。博物学に関しては〔中略〕余暇のすべてをその学習にささげるつもりです」。

じつをいえば、アカデミーへの推薦がはじめて話題

になるのも、博物標本の収集を評価されたからである。一七八二年八月二六日付の手紙は、つぎのように報告する。「鉱物学標本に対する興味は、ますます強まるばかりです。〔中略〕レモン氏は、わたくしが博物学のこの分野に専念することに賛成しています。先日は、もしわたくしの収集品がもう少し充実したら、アカデミーに入会させるように取り計らおう、とまで言いました」。しかしアシャルはこの方面からの推薦には満足せず、「たんなる恩顧や収集品への評価から、アカデミー会員の資格を獲得しても、少しもうれしくないでしょう」と付け加えている²³。

それゆえ彼がこの学芸団体への入会に積極的になるのは、もう少しのちの一七八四年初頭からである。このときアカデミーに空席が生じたので、彼は新会員に志願したが、推薦者（おそらくレモン）から、首尾よく選出されるためには、パリ王立医学協会通信会員の資格に加えて、すでに王国内アカデミーの準会員になっていることが望ましいと助言された。そこで彼はアヴィニョンの恩師に援助を求め、ニームのアカデミーなら、「その書記は貴下と交流があります²⁴」ので、そちらに紹介してもらえないかと依頼する。アシャルの念頭にあったのは、カルヴェの友人でニームのアカデミー終身書記、植物学者、博物学者、考古学者、古銭学者、愛書家、古メダル収集家のジャン＝フランソワ・

セギエである²⁵。しかしセギエは当時すでに八〇歳であり、アカデミーの仕事からは引退していることがわかると、アシャルはカルヴェに、後任として書記に就任した医師ラズーアてに手紙を書いてほしいとふたたび懇願し、同時にセギエにも自分から手紙を書き送って間接的支援を求めたが、同年中にセギエが死去したために、ニーム・アカデミー準会員への推薦は不発に終わる。それでもアシャルは、マルセイユ・アカデミーの科学懸賞論文として「トラガカント・ゴム」に関する研究論文を準備し、一七八五年春に提出するが、これだけの運動を展開したにもかかわらず、このときは選出されなかった²⁶。

それゆえアシャルが同僚の医師ヴィダルとともにアカデミー会員に選出されるのは、ようやく一七八六年八月のことである。この間に『プロヴァンス・ヴナスク伯領事典』の各巻を寄贈したことが、功を奏したのかもしれない。同年一二月には、新会員の入会演説がおこなわれ、「ヴィダル氏は自然諸科学と商業との互恵的關係を論証しよう」と試み、アシャル氏は文学と科学とは相互に無関係ではなく、むしろ互いに協力しあうと論じた²⁸。アシャルがこの入会に満足していたことは、その後の会合への精勤ぶりから推測される。はやくも一七八七年一月には「養蜂に関する諸論文」の審査委員になり、また毎回の会合に出席して「著

名なるキャブテン・クックへの讃辞」や「プロヴァンス諸港で船舶に被害をあたえる蛆虫」や「トルバドゥールの頌歌と詩」など多様な論題に参加し、さらに一七八八年五月から七月にかけては、教育問題や刑罰問題など雑多な論題に関する大多数の論文審査を担当する。「啓蒙の世紀」における地方アカデミーが、百科全書的な知識を共有する科学・芸術愛好者のサークルだったことは、この事例からもよく理解されるだろう。そして当時の知識人たちは、ヴェイダルとアシャルの入会演説がよく表現するように、多様な学問や雑多な知識が相互に結びついて調和的な全体を形づくり、人類の知的完成を実現するはずだという信念を、まだ保持していたのである。この時代のマルセイユ・アカデミーには、高名なプロテスタント商人ドミニク・オディベールとジャック・セマンデイ、元セネシャル管区総代官ギヨーム・ド・ポール、地方財務総収税官ルイ・ノギエド・マリジェなど、地域社会を代表する知的エリートが名を連ねていたが、アシャルは彼らと交流しつつ職務を遂行し、やがて一七九〇年にはアカデミー理事に選出される。

三、三重団結会所の創立と内部紛争

総じてアカデミー会員としてのアシャルの活動が順調

に継続されるのに対して、フリーメイソンとしての彼の活動は、内紛と波瀾の連続であるといつてよい。そもそも彼がいつどこでフリーメイソン団に加入したか、そして徒弟・職人位階を経て、いつごろ親方位階に昇位したのか、現状では何もわからない。わかっている事実は、彼が創設した三重団結会所を「正規化」するために、一七八二年六月、パリ所在の統轄団体であるフランス大東方会 *Grand Orient de France* の指示を求めたとき、アシャルとその二人の兄弟（ジャン・バティストとアントワーヌ）は、いずれも「選良親方」の位階を保有していたことである。パリからとどいた指示にもとづき、三重団結会所はマルセイユ所在の「完全誠実」会所に三人の代表を派遣し、公認手続きへの賛同をえると同時に、トゥロン所在「恒久友人」会所からも支持をとりつける。これは自発的に結成された新会所が、パリの中央組織から「正規の」会所として公認されるために必要な手続きであり、アシャルがこの時点では、一七七三年に発足したフランス大東方会、およびそれが整備した「フランス儀礼」を基準として会所の組織化を図ったことは明白である。

翌一七八三年六月一日には、三重団結会所のパリ代表としてクロード・エマニュエル・ジョゼフ・ピエール・ド・パストレが指名され、大東方会との連絡役になる。パスト

レは当時二六歳、パリ租税法院評定官の地位にあり、また威光ある「九詩神」会所所属のメイソンでもあった。大東方会はその直後に公認を決定し、マルセイユ所在「選良結集」会所の仲介により、三重団結会所に会憲を授与する指示をあたえる。こうして同年七月二七日、会所長アシャーの司会のもとに厳肅な設立式が挙行される。会所の集会記録を以下に引用してみよう。「選良結集会所の」首席代表は、剣を持って起立するよう兄弟全員に命じたうえで、つぎのように述べた。フランス大東方会の名のもとに、その権限を託されたわれら代表は、マルセイユの地に聖ヨハネの会所を、三重団結の固有名により設立する。尊敬すべき三重団結会所はここに設立された。この厳肅な宣言につづいて、列席者全員の拍手、会所長と弁士の演説、他会所代表への謝辞、会所長による会憲の受領、貧民救済用の献金箱の提示があり、そして最後に華やかな宴会が催される。「広間は緋色の壁布で装飾され、東側の講壇の上部には純金属の縁取りで飾られた天蓋が据えられた。食卓に置かれた盆には、市松模様とフリーメイソンの象徴の浮き彫りとが施されていた。北側の座席の一部は、音楽隊により占められた」。

しかし公認された喜びもつかのま、三重団結会所は内部分裂におちいる。はやくも同年八月中旬に、あらたに公認

史苑(第七二巻第一号)

された「叡智愛好者」会所の設立式への代表派遣をめぐり、会所長アシャーと弁士アントワーヌ・カステラネが対立し、同月末には、マルセイユに帰郷したパストレのために招待宴会を催す計画をめぐり、両者の意見がふたたび対立する。会所内の軋轢は急速に高まり、同年秋にはアシャー派とカステラネ派への分裂が決定的になる^⑤。

この内部分裂が生じた原因は、複合的な視点から解明されるべきである。まず哲学的またはイデオロギー的な視点からみれば、アシャーはカトリック的「愛徳」精神を保持しながらも、「啓蒙の世紀」を特徴づける道徳的完成、世界市民主義、博愛主義の理想に共鳴し、フリーメイソン会所はこの普遍的理想を実現すべき活動主体であると考えていた。それゆえ彼は、諸外国の統轄団体をも積極的に受け入れ、フランス大東方会への服属を拒否するスコットランド聖ヨハネ会所にも言及して、「スコットランド儀礼の名で知られる当地の会所がおこなった数々の善行」を多くに賞讃する。これに対してカステラネは、国民的枠組みによる排他的なフリーメイソン団の構想に立脚し、アメリカ独立戦争末期に高揚したフランス人の優越意識を背景に、友愛団と政治的ナシヨナリズムとを一体化させる傾向を示した。それゆえカステラネは、「外国の法」にしたがう一部のメイソンを「軽蔑すべき人間たち」と呼んで嫌悪した

が、彼が叡智愛好者会所の設立式への代表派遣に反対したのも、まさしくこの理由からだったと推測される。この会所は「哲学的スコットランド儀礼」を採用したが、この儀礼はフランス大東方会には一定の距離をおき、ドイツ起源の「テンプル騎士厳守会」による公認を主張したからである。

つぎに世代的・社会的視点からみても、両派の対照的性格は明白である。分裂当時のアシヤール派は一三名、反対派は一五名を数えたが、会所長に忠実な会員のグループは、三七歳から五三歳までの壮年層を中心に構成され、アシヤール自身も三二歳に達している。ところがこれに対して、反対派のグループは大多数が三〇歳未満の青年であり、そのなかで二九歳のカステラネは年長に属する。同じく職業の面からみても、会所長派の人々の多くは医師、外科医、弁護士、薬剤師などの自由業者、または教会参事会員、修道院オルガニストなどの聖職関係者であり、総じて知識人層に属する。これに対して反対派の圧倒的多数は卸売商と薬種商であり、公証人カステラネはむしろ例外といつてよい。しかもここでいう「卸売商」は、オディベールやセマンデイのような富裕な国際貿易商ではなく、より下層の再販業者だったと考えられる。要するに教養ある壮年層を主体とするアシヤール派に対して、実務教育しか受けてい

ない若年の商人グループが叛旗をひるがえしたのである。カステラネと彼の友人たちが、学識ある会所長の権威を好まず、また若きエリート官僚バストレとの交流に消極的態度をとった理由は、以上のような背景から説明される。

それゆえ両派間の対立の根は深かったが、メイソン会所内で紛争がおきた場合の常として、敵対する両派はそれぞれ自分たちの主張を文書にしたため、大東方会に送付して裁定を求める。たがいに相手を非難するこれら文書の束を検討したのち、「地方担当部」*Chambre des Provinces* は一七八四年六月三日の決議により裁定をくだしたが、その内容はアシヤールを満足させなかった。おそらくパリの統轄団体は、外国系「スコットランド諸会所」に共感を寄せるコスモポリタンな会所長に、好感をもたなかったと推測される。もっともこの裁定がカステラネ派に三重団結会所への復帰と和解を勧告したにもかかわらず、同派はそれにしたがわず、会所から完全に離脱してしまったので、大東方会の調停にはだれも満足しなかったと考えるべきかもしれない。そこでアシヤールは会所に残留した同志たちと組織を再建し、これを機会に大東方会から決定的に遠ざかり、やがてリヨン所在のテンプル騎士厳守会オヴエルニュ管区「スコットランド執政部」*Directoire écossois* に接近して、そこへの加入を認められ、一七八四年末ごろに矯正スコッ

トランド儀礼への転向を実現することになる。

この転向は、マルセイユ・フリーメイソン史における重要な転換点をなすばかりでなく、本稿の主題であるアシャーの個人的軌跡にとっても決定的な意味をもつと考えられる。なぜならばそれは、ドイツ起源の神秘的・騎士団的なフリーメイソンの流派を地中海沿岸に導入すると同時に、マルセイユの医師が、リヨンの絹織物商人であり、スコットランド執政部総裁であるジャン・パティスト・ヴィレルモスとの文通により、その秘教的影響を受ける契機をなすからである。この点からみて興味深い事実のひとつは、同時期のアシャーがメスメル学説に興味をいだきはじめたことである。一七八五年三月一六日付の書簡で、彼はアヴィニョンの恩師にあてて書いている。「王立医学協会がマルセイユ医師会にあてた覚書のなかに、動物磁気説に反対する手紙を寄稿されたのは、おそらく貴下でありましょう。貴下はそれをペテンだとお考えのようですが、わたくしが自分の目で見た効果は、空想だけがこの奇妙な施術の動因ではないと信じさせるに足るものです。偏見をもたずに、わたくしはそこに未知の何かがあると考えています」。この告白は、前年の一七八四年にメスメル学説がリヨンに流行し、磁気療法を実践する「和合」*La Concorde* 協会が同市内に設立され、ヴィレルモスがその

史苑（第七二巻第一号）

熱心な会員になった事実を想起するとき^⑩、その意味がよく理解されるだろう。こうしてアシャーは、アカデミー会員に選出される以前から、探究すべき新しい道、すなわちメイソン秘教主義とメスメル学説の隠された道を発見していた。それは彼の知的活動と霊的生活を、その後半生にいたるまで方向づけることになる。献身的な医師、地方百科全書の編纂者、精勤なアカデミー会員の背後に、いわばアシャーの第三の顔として、熱心な秘教的探究者の顔がある。

エピローグ—三重団結会所の活動停止

「自由主義的な」フランス儀礼とは異なり、上位機関の権威を尊重する矯正スコットランド儀礼を採用したのち、三重団結会所は活気をとりもどし、しばらくは順調に運営される。会所長アシャーは一七八六年五月に「内部団」または「聖都善行騎士団」*Ordre des Chevaliers Bienfaisants de la Cité Sainte* への昇位を認められ、多数の入会志願者のために加入儀礼を執行する。これら志願者の多くはフランス儀礼からの転向者だったので、彼らを受け入れるために象徴位階（初級三位階）の儀礼について妥協が図られた。他方でアシャーは、有能かつ有徳と思われる

る親方会員を順次スコットランド執政部に推薦し、高位階の授与を提案する。このような急速な組織拡大により、会員数は四〇名前後に達したと推定されるが、それは結果的に会員の質的低下や昇位への競争意識を生みだす危険性をもたない、表面上の盛況とは裏腹に、あらたな不和と紛争の火種を醸成することになる。

こうして一七八六年秋ごろから徐々に内部の亀裂が深まり、翌年には修復不可能な状態に立ちいたる。この第二の内部分裂の原因は未解明の部分もあるが、確実なことは会所長が完全に孤立し、圧倒的多数の会員が書記ジョゼフ・カルカソンの周囲に結集して、「専制君主のように命令する」アシャルを批判したことである。事態を紛糾させた副次的原因は、アシャルが会員ボワソンから一〇〇〇エキユ（＝三〇〇〇リーヴル）の借金をして、期限までに返済できなかったことにあるが、分裂の背景には会所長と書記との個人的対抗意識があったらしい。カルカソン又は一七八六年七月に親方位階に昇位したのち、翌年二月から五月までリヨンに滞在し、その間に第四位階から善行騎士位階までやや異例の昇進をとげた。それは執政部総裁ヴェルモスが、この人物の「熱意」、「従順さ」、「年齢と思索の成熟度」などの精神的資質を高く評価したからであるが、このような手放しの讃辞が、いささか気性の激しいア

シャルの嫉妬心を刺激したことは想像にかたくない。^⑧

ともあれこの第二の内部紛争はもはや解決不可能となり、一七八八年二月七日、執政部の下位機関により会所の活動停止が命じられたので、フランス革命後の一八〇一年に活動を再開するまで、三重団結会所は長い休眠期間に陥ることになる。しかし本稿の主題である個人史の視点から注目すべきことは、アシャルがこの時期に財政的苦境を訴えて、リヨン執政部に金銭上の援助を願い出たことである。「この会所の事件が世間に知れわたり、わたくしはすっかり悪者にされました。さらにある事業に失敗して財政状態が悪化したので、兄弟たちには頭を下げずに援助を求めようと考えましたが、そこで出会った連中はわたくしの破滅を加速させ、抜け目なくわたくしの貧窮を倍加したのです。〔中略〕もしも貴下が、妻と三人の子供をかかえるメイソンを憐れんでくださるなら、一年か二年のあいだ、資金を回収するための期間を乗り切るのに必要な金額を貸与してくださるものと期待しております」（一七八八年一月二日付）^⑨。扶養家族を引き合いに出して、憐れみと金銭を乞う言葉は、愛徳的な医師にも、誇り高いアカデミー会員にも似つかわしくないが、とくに後者としての活動は、この時期に頂点に達しつつあるだけに、意外な印象を禁じえない。

「ある事業に失敗」したとは、具体的に何をさすのか、ヴィレルモスあて書簡にも、カルヴェあて書簡にもまったく言及がなく、現状ではわからない。しかしひとつの可能性として、鉱物学への異常な情熱が、医師業への関心をしだいに失わせ、やや危険な知的漂流を開始していた事実と関連するのかもしれない。一七八七年一月二三日付の恩師あて書簡は、つぎのように告白する。「しばらくまえから、われわれの職業実践を放棄すべきか、それとも継続すべきか悩んでいます。無数の障碍が立ちはだかっています。自分の趣味が、わたくしを患者たちから遠ざけています。わたくしは夢中で山々を駆けめぐり、鉱物学に熱烈な興味をいただいています。わたくしはデイトリシユ男爵と文通しています。彼がこの分野で役職をあたえてくれるなら、ためらわずに医師業を放棄するでしょう」。

アルザス地方の「製鉄王」、一八世紀「実業家貴族」の代表例として、経済史上有名なデイトリシユ男爵の名がここで登場するのは、驚きの感情とともに、一連の疑問を呼びさませずにはおかない。おそらくアシャールが文通した相手は、すでに高齢のジャン(三世)ではなく、その息子フィリップフレデリクだろう。一七四八年生まれの後者はアシャールとほぼ同世代、著名な鉱物学者であり、一七八六

年にはパリ科学アカデミー会員に選出されている⁶⁶。しかしアシャールはいつ、どのようにしてこの人物と知りあったのか。アカデミー組織間の交流をつうじてだろうか。それともテンブル騎士厳守会のネットワークが、有効な連絡手段を提供したのだろうか。アルザスの中心都市ストラスブールは、厳守会ブルゴーニュ管区スコットランド執政部の所在地であり、フランスとドイツを結ぶメイソン国際交流の十字路だったことを想起すれば、その可能性は充分にあると考えられる。しかしフィリップフレデリク・ド・デイトリシユは、フリーメイソンだったのか。彼は少なくとも急進啓蒙主義の秘密結社バイエルン光明会の会員であり、この資格により神秘的メイソンと光明会員とが複雑に入り乱れるストラスブール社交界に参入していた。とはいえ、アシャールはこのアルザスの企業家からどんな「役職」を期待していたのか。彼の事業の失敗は、この方面にかかわるのだろうか。現在利用できる史料は、これらの疑問に答える情報をあたえない。たしかな事実には、リヨンのスコットランド執政部は、マルセイユの医師による財政援助の求めには応じなかったこと、しかしその結果、この医師が破産した形跡はないことである。一七八九年一月一日付のカルヴェあて書簡で、アシャールはいくらか誇らしげに、自分が「化学の教授」に任命されたことを報告している⁶⁸。

以上の分析から、どんな結論がえられるだろうか。マルセイユの医師の前半生を再構成する作業をつうじて確認されることは、複数の系列の史料を探索し、それらを相互に比較することにより、多少とも複雑な人物の軌跡を、複眼的視角から観察することの重要性である。多面的な相貌をもつアシャルルの知的肖像画を描くためには、医学上の恩師にあてた書簡、学芸アカデミー会合記録、フリーメイソン文書などを相互に比較対照し、そこから均衡のとれた解釈をみちびくよう努力する必要がある。しかしよく考えてみれば、そもそも単純な歴史現象など存在しないのだから、時代と分野とを問わず、どんな研究対象についても、単一の史料にのみ依拠して作られた歴史記述は、一面的たらしめるをえないのである。

註

- (1) 本稿はフランスの地方史雑誌 *Provence historique* の特集号「Autour de Roland Caty : les élites de Provence (XVIII^e-XXI^e siècle)」(二〇一二年刊行予定) に掲載される論文「Claude-François Achard dans sa jeunesse : Médecin, académicien et franc-maçon marseillais à la fin du XVIII^e siècle」を、日本の読者向けに加筆修正し、大幅に改稿したものである。
- (2) Régis Bertrand, « Claude-François Achard, l'homme qui aimait les livres », *Marseille, la revue culturelle de la ville*, no. 168, 1993, pp. 16-19.
- (3) René Merle, « C. F. Achard et le bilinguisme provençal de la fin des Lumières », *Provence historique*, t. 38, fasc. 153, 1988, pp. 285-302.
- (4) Patrick Barrau, « La Triple Union (1801-1815). Une loge chrétienne sous l'Empire (I), (II) », *Marseille, revue municipale*, no. 113, 1978, pp. 88-97 ; no. 114, 1978, pp. 34-44, 99-100.
- (5) Dominique Sappia, « Claude-François Achard (1751-1809). Un mystique marseillais, précurseur en matière de culture et d'humanitaire », *Renaissance Traditionnelle*, no. 156, 2009, pp. 267-285.
- (6) 深沢克己「フリーメイソンの社交空間と秘教思想——一八世紀末マルセイユ「三重団結」会所の事例から」深沢克己・桜井万里子編『友愛と秘密のヨーロッパ。社会文化史——古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』(東京大学出版会、二〇一〇年)所収、二二七—二六九頁。なおこの論文の骨

「*Katsumi Fukasawa*, « Du Rite français au Rite écossais recifié : le choix de la Loge de la *Triple Union* de Marseille à la fin du XVIII^e siècle », in : Pierre-Yves Beaurepaire, Kenneth Loisel, Jean-Marie Mercier et Thierry Zarcone (dir.), *Diffusions et circulations des pratiques maçonniques en Europe et en Méditerranée, XVIII^e-XIX^e siècles. Actes du colloque international de Nice, 2 et 3 juillet 2009*, Paris, Éditions Classiques Garnier-ムジブ, 2010, p. 115-120. 表紙に「*Katsumi Fukasawa*」の署名がある。

- (7) Bibliothèque municipale d'Avignon (B. M. A.), Fonds patrimoniaux, Ms. 2368, Correspondance de Calvet avec Claude-François Achard ; Archives de l'Académie de Marseille (A. A. M.), Registre de procès-verbaux, no. 8, de 1782 à 1793 ; Bibliothèque nationale de France (B. N. F.), Cabinet des manuscrits, Fonds maçonnique, FM² 292, Dossier de la Loge de la *Triple Union* ; Bibliothèque municipale de Lyon (B. M. L.), Fonds ancien, Fonds Jean-Baptiste Willermoz, Ms. 5869-5881, Correspondance avec Achard et autres.
- (8) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368, アンシャルのカルヴェット書簡, 一七八四年一〇月二二日付。
- (9) B. N. F., Cabinet des manuscrits, Fonds maçonnique, FM² 292, Tableau de la Loge du 27 juillet 1783.
- (10) Jean-Marie Mercier et Thierry Zarcone, « Calvet, Esprit-Claude-François (1728-1810) », in : Charles Porset et Cécile Révauger (dir.), *Dictionnaire prosopographique des franc-maçons au XVIII^e siècle*, Paris, Honoré Champion (à paraître).

この書物は未刊行であり、著者ジャン・マリ・メルシエとティエリ・ザルコン両氏の御好意により、原稿を参照することができた。この場を借りて両氏に感謝の意を表したい。なおアヴィニョンの「イェルサレム聖ヨハネ」会所に関して、同メルシエの著書が基礎文献となる。Jean-Marie Mercier, *Les Francs-maçons du pape. L'art royal à Avignon au XVIII^e siècle*, Paris, Éditions Garnier, 2010.

- (11) 大野誠『シントルマンと科学』(山川出版社、世界史リブレット三四、一九九八年)、三五―三八頁。
- (12) エリアナス・アシュモウルに引くのは「*Oxford Dictionary of National Biography*, Website : <http://www.oxforddnb.com>, article « Elias Ashmole » ; Daniel Ligou (dir.), *Dictionnaire de la franc-maçonnerie*, nouvelle édition, Paris, P. U. F., 1987, pp. 83-84. 古物収集家と初期フリーメイソンとの緊密な結びつきは、エール・イヴ・ホルバールにより的確に指摘されている。Pierre-Yves Beaurepaire, *La République universelle des franc-maçons de Newton à Metternich*, Rennes, Éditions Ouest-France, 1999, pp. 26-30. エール・イヴ・ホルバール [深沢克己編訳]『啓蒙の世紀』(山川出版社、二〇〇九年)、二九―三三頁。
- (13) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368.
- (14) *Ibid.*, カヴィスとの長期停泊は「もろいイギリス海軍による海上封鎖が原因である」。
- (15) *Ibid.* のように以降、イレ神父とロティエとの名は「アンシャルの書簡に頻出する(一七八二年八月、一七八三年一月、一七八四年一月、一七八五年一月、一七八九年一月および一二月など)」。

一八世紀末フランスの知的エリートとフリーメイソン（深沢）

- (16) *Ibid.* 一七八二年一月二一日付書簡。
- (17) *Ibid.* 二番目の症例は、今日の医師ならば胆石を疑うだろうか。ともあれ当時のアシヤールはまだメスマル学説を知らず、磁気療法や催眠療法を語ることはなく。
- (18) *Ibid.* 一七八二年八月二十六日付。
- (19) *Ibid.* 一七八三年五月二十六日、八月十三日、八月二十二日付。アシヤールの著作の評価については Bertrand, art. cit. (note 2), pp. 18-19; Sappia, art. cit. (note 5), pp. 268-270.
- (20) *Ibid.* 一七八三年九月一九日付。
- (21) *Ibid.* 一七八四年五月一四日付。
- (22) A. A. M., Registre no. 8, de 1782 à 1793. 引用文中に名前のあるジャン・バティスト・ヘルナール・グロンソンは、公証人として碩学の古物愛好家であり、一七七三年にアカデミー会員に選出され、一七八六年一月に同事務局長となる。Jean Chélini, Félix Reynaud et Madeleine Villard, *Dictionnaire des Marseillais*, Aix-en-Provence, Édisud, 2001, p. 173. 他方でグロンソンは高名な「スロットランド聖ヨハネ」会所に所属し、「東方の騎士」位階をもつメイソンでもあった。B. N. F., Fonds maçonnique, FMⁿ 291, Dossier de la Loge de Saint-Jean d'Écosse à l'Orient de Marseille, Tableau de la loge de 1784. それゆえグロンソンの事例もまた、古物収集家とフリーメイソンとの親和性を例証する。
- (23) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368.
- (24) *Ibid.* アシヤールはアカデミー会員の医師レモンと親密な関係にあり、後者の死去する一七八八年九月まで、いろいろの援助を受けている。
- (25) *Ibid.* 一七八四年一月一六日付。
- (26) ジャン・フランソワ・セギエの通信網と、そのなかでカルヴェトの往復書簡がしめた位置については、Odile Cavalier, «Un triumvirat de littérature: la correspondance entre Charles-François de Calvière, Esprit Calvet et Jean-François Séguier», in : Gabriel Audisio et Françoise Pugnière (dir.), *Jean-François Séguier (1703-1784). Un Nîmois dans l'Europe des Lumières*, Aix-en-Provence, Édisud, 2005, pp. 195-208.
- (27) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368. 一七八四年三月三日、五月一四日、七月二二日、十一月二七日、一七八五年三月一六日付書簡。A. A. M., Registre no. 8, Procès-verbal du 2 avril 1785. なおトラガカント・ムトは西アジア産の樹液を原料とする物質で、当時は接着剤のほか、医療用の薬剤、工業用の加工剤など広い用途があり、レヴァント貿易をめぐってマルセイユに輸入されていた。
- (28) A. A. M., Registre no. 8, Procès-verbal du 6 décembre 1786.
- (29) *Ibid.*, Procès-verbaux du 10 janvier 1787, du 16 avril au 5 juillet 1788, et *passim*.
- (30) これらマルセイユ地方名士の社交生活と文化生活に ついては Chélini, Reynaud et Villard, *op. cit.* (note 22), pp. 29, 260, 320-321 ; Raoul Busquet, *Histoire de Marseille*, Marseille, Robert Laffont et Jeanne Laffitte, 1945, nouvelle édition, 1998, pp. 264-268 ; Octave Teissier, *Les anciennes familles marseillaises*, Marseille, Laffite Reprints, 1888, réimp., 1995, pp. 95-99, 137-140 ; François-Xavier Emmanuel, *Vivre à Marseille sous l'Ancien Régime*, Paris, Perrin, 1999, pp. 176-190. なお付言すれば、セマン・ド・ヌーヴ・ポールは、前

述のグロソンと同じくスコットランド聖ヨハネ会所に所属するフリーメイソンである。セマンディは同会所の会所長を数期にわたり務め、また一七八四年の時点では徒弟位階だったド・ポールは、一七八九年には「会璽尚書」の役職についている。これに対してドミニク・オディニールは同会所の会員ではなかったが、彼の近親である貿易商人ジョゼフ・オディニールとシヨルジュ・オディニールは同会所の名簿に名を連ねている。B. N. F., FM² 291, Tableau de la Loge de Saint-Jean d'Écosse de 1784 ; Musée Paul Arbaud (Aix-en-Provence), Impr. S23, «Tableau des FF composant la T. R. L. St. Jean d'Écosse. [...] Plan de la Grande Lumière 5789» (1789); Jacques Choiseux, *La respectable Loge de Saint-Jean d'Écosse, mère loge écossaise à l'orient de Marseille entre 1762 et 1787*, 2e éd., Bruxelles, Chez l'auteur, 1986, pp. 134-135, 学芸マカラーニとスコットランド聖ヨハネ会所とが緊密に結びついて、マルセイユの知的エリートに多層的な社交空間を提供した事実が、この事例からもよく観察される。

(15) B. N. F., Cabinet des manuscrits, FM² 292, doc. cit. (note 9). ここにフリーメイソンの位階制について、概略を説明しておこう。フリーメイソンは段階的な秘儀伝授により位階を上昇し、より高い精神の光明に到達する。徒弟・職人・親方から構成される初級三位階は「青の位階」または「象徴位階」、イギリスではたんに「職能」Craftと呼ばれ、中世石工団体の象徴を継承しつつ組織され、すべてでフリーメイソン団に共通である。しかし一七四〇年前後から、この象徴位階の上部に新位階がつきつきに創出され、そこに数々の伝説と儀礼を付加することにより、団体の階層構造を複

雑化すると同時に、その思想的性格を変質させる。それはまず「緑の位階」である「スコットランド親方」にはじまり、複数の位階に分かれた「選良親方」または「復讐位階」を経て、「東方の騎士」や「薔薇十字騎士」などの「騎士位階」または「赤の位階」へと到達する。一八世紀中葉から多彩な発達をとげるこれらの新位階は、総称して「スコットランド儀礼」または「高位階」と呼ばれるが、同世紀末には高位階の混沌状態を整理する努力がなされ、フランス儀礼は象徴位階と合わせて七位階、アメリカ合衆国のチャールストンで成立する「古式受容スコットランド儀礼」は三位階に整備される。これに対してリヨン改革派の「矯正スコットランド儀礼」は、象徴三位階と「聖アン・ドレ・スコットランド親方」の上部に「修練士」と「聖都善行騎士」からなる「内部団」、さらにその上部に「誓願者」と「大誓願者」を含む「本部会」を配置する三層構造をなしている。これらの位階と儀礼については、さしあたりポール・ペール前掲書(註(12))の用語解説と図版解説を参照。

(16) *Ibid.*, Dossier de la Loge de la *Triple Union*, Extraits des registres du 16 mai et du 20 septembre, Planche du frère Achard du 28 juin, Lettres de la Loge de la *Parfaite Sincérité* du 4 octobre et de la Loge des *Amis Constants* de Toulon du 22 octobre 1782. 「完全誠実」会所は一七六六年に創設されたマルセイユの古参会所で、新設会所に対して推薦主体となる権利があった。またトゥロンとの「恒久友人」会所は一七八〇年に創立され、商人を主体とする会員構成で、マルセイユのスコットランド諸会所(高位階会所)と交流があったらしい。Maurice Agulhon, *Penitents et franc-maçons*

一八世紀末フランスの知的エリートとフリーメイソン（深沢）

- de l'ancienne Provence. Essai sur la sociabilité méridionale*, Paris, Fayard, 1968, nouvelle édition, 1984, p. 169.
- (33) B. N. F., Cabinet des manuscrits, FM² 292, Extrait du livre d'architecture de la *Triple Union* du 1^{er} juin, Lettre et instructions du Grand Orient du 2 juin 1783. 「選良結集」会所は、一七六七年に創立され、完全誠実会所とならぶマルセイユの古参会所。
- (34) *Ibid.*, Extrait du livre d'architecture de la *Triple Union* du 27 juillet 1783. なお引用文中の「兄弟」frèresはフリーメイソン同士の呼称であり、秘儀伝授を受けた団員の平等と連帯を表現する。
- (35) 三重団結会所の内部分裂をめぐる以下の論述は、深沢前掲論文註(6)の要約にすぎない。依拠する史料の詳細については、そちらを参照していただきたい。
- (36) マルセイユ実業界のエリートを主体に構成されるこの会所については、すでに註(22)と註(30)でも言及したが、会員数二〇〇名以上を数えるこの会所は、マルセイユ最古にして最大のフリーメイソン会所であり、国際的影響力も大きかった。
- (37) B. N. F., Cabinet des manuscrits, FM² 292, Dossier de la Loge de la *Triple Union*, Discours de l'orateur Castellanet et du vénérable Achard, le 27 juillet 1783.
- (38) 前述のとおり、クロード・ド・バストレはこの当時すでに申し分ないエリートだったが、その後の彼の経歴はそれを十二分に裏書きする。すなわち一七八七年には「碑文・文芸王立アカデミー」会員、その翌年に訴願審査官と九詩神会所の会所長就任、さらにフランス革命勃発後一七九一
- 年にフイヤン派の立法議会議員、第一帝政期一八〇四年にコレージュ・ド・フランス教授、一八〇九年に元老院議員、一八一〇年には帝政貴族として伯の称号をえる。Albert Soboul (dir.), *Dictionnaire historique de la Révolution française*, Paris, P. U. F., 1989, p. 821. これと対比して、革命期のカステラネの軌跡をたどると、両者間の社会的・イデオロギー的な距離がよく理解されるだろう。この公証人は、一七八九年の全国三部会第三身分代表に選出されたのち、一七九三年五月にはマルセイユ地区組織締結委員会書記として、国民公会に対する「連邦主義」反乱を指揮したからである。Chelini, Reynaud et Villard, *op. cit.* (note 22), p. 86.
- (39) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368.
- (40) Alice Joly, *Un mystique lyonnais et les secrets de la franc-maçonnerie : Jean-Baptiste Willermoz, 1730-1824*, Paris, Demeter, 1938, réimprimé, 1986, pp. 215-224 ; Robert Darnton, *Mesmerism and the End of the Enlightenment in France*, Cambridge, Massachusetts-London, Harvard University Press, 1968, pp. 68-69.
- (41) この点に関することは Sappia, art. cit. (note 5), p. 273 に依拠する。ただしアシャルが善行騎士位階に昇位したこととは、一七八六年七月以降の書簡中に、ラテン語の戦士名 *Eques a galea aurea* (黄金兜の騎士) を使用していることから確認される。B. M. L., Fonds ancien, Fonds Jean-Baptiste Willermoz, Ms. 5869, *passim*. これに対して、少なくとも一八〇四年以前には「アシャルは「本部会」の最高位階の秘密に到達することはできなかった。ヴェイレルモス

- は、三重団結会所の会員オギュスタン・シルにあてた同年七月二〇―二三日付秘密書簡のなかで、そのことを明記している。*Ibid.*, Ms. 5883, Lettre datée du 1^{er} au 4^e thermidor an XII.
- (42) *Ibid.*, Ms. 5869, Lettre d'Achard du 23 juillet 1786.
- (43) *Ibid.*, Ms. 5870, Copie de la lettre officielle de Willernoz à Achard du 14 mai 1787 ; Lettre d'Achard à Willernoz du 8 octobre 1787 ; Ms. 5871, Lettre d'Achard à Millanots chancelier de la Régence écossaise du 6 mars 1788.
- (44) *Ibid.*, Ms. 5871, Lettre d'Achard au Directoire du 10 décembre 1788. 引用文中の「兄弟たち」は、註(34)で説明したとおり、フリーメイソン団員間の呼称であり、(33)ではとくに三重団結会所の会員仲間をよびつづる。
- (45) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368.
- (46) ティートリシヨ一族とその製鉄企業については、Guy Richard, *Le monde des affaires en Europe de 1815 à 1917*, Paris, Armand Colin, 2000, pp. 119-127 ; *id.*, *La noblesse d'affaires au XVIII^e siècle*, 2^e édition, Paris, Armand Colin, 1997, pp. 91-95.
- (47) ストラスブールのフリーメイソン諸会所、とりわけスコットランド執政部のおかれた「純真」Candeur 会所については、Pierre-Yves Beaurepaire, *L'autre et le frère. L'étranger et la franc-maçonnerie en France au XVIII^e siècle*, Paris, Honoré Champion, 1998, pp. 399-443. 光明会員フイリップ＝フレデリック・ム・ティートリシヨの名は、*ibid.*, p. 420の表にあふわれぬ。
- (48) B. M. A., Fonds patrimoniaux, Ms. 2368.

French Intellectual Elite and Freemasonry at the End of the Eighteenth Century: the Interior Trajectory of Claude-François Achard, Physician in Marseilles

FUKASAWA, Katsumi

Claude-François Achard (1751-1809) is known by the historians of Provence as philanthropical physician, provincial encyclopedist, active academician and municipal librarian, who marked the cultural history of Marseilles before and after the French Revolution. He is also known by the specialists of freemasonry as “venerable master” of the *Triple Union* Lodge, which adhered to the “Rectified Scottish Rite” of German origin and reformed in Lyons. The present article analyzes the process of his intellectual formation during the first half of his life in 1770s-1780s.

His correspondence with Esprit Calvet, professor at the medical faculty of Avignon who had invested him with doctor’s degree, reveals the predominant influence he received from his master. Collector of rare books and curiosities, interested in antiquities, numismatics, archeology and natural history, Calvet was among the typical intellectuals of the Enlightenment, representing the antiquarian-freemason style, inherited from seventeenth-century England. Achard followed his master’s example to be interested in collection of rare things and especially in mineralogy.

Achard launched into academic activities from the age of thirty. Nominated as correspondent of the Royal Society of Medicine of Paris in 1781, he took active steps from 1784 for the purpose of his reception into the Academy of Marseilles. After having tried in vain to be associated to that of Nimes by the mediation of Calvet, he gifted the Academy of Marseilles with his books entitled “Dictionary of Provence and of Comtat-Venaissin”, published from 1785. Received as regular member in August 1786, he played an important part in the activities of this society, so that he was nominated as its director in 1790.

The Masonic life of Achard was rather agitated. The *Triple Union* Lodge, founded by him in 1782 and acknowledged by the *Grand Orient de France* in 1783, got soon into interior trouble and divided into two opposite groups. Then Achard and his supporters decided to leave the *Grand Orient* with the “French Rite”, and to join the Rectified Scottish Rite of the Strict Observance, under the authority of Scottish Directory of Lyons. Thus he entered into correspondence with Jean-Baptiste Willermoz, chancellor of the Directory and “patriarch of Masonic esotericism”, interested also in mesmerism in vogue on the eve of the French Revolution.

However, the *Triple Union* Lodge got into another trouble from 1786 so that the Directory ordered the interruption of its activity in February 1788. Achard complained about his pecuniary embarrassment, nevertheless he continued his academic activities and his personal research in mineralogy.